

## お題『桜』

「桜の木の下には死体が埋まっている」とは良く言ったもんだ。  
なんとも異常な美しさなんだよね。私も本当にそう思う。  
桜は特別な植物で、他のそれとは決定的に何かが違う気がする。  
私は今年も満開の桜の下を歩いた。

すごくすごく綺麗すぎると、無気味さや悲しさや、儂さまでを感じてしまうことがあるんだ。  
坂口安吾もそういのを感じて、あんな文章書いちゃったんでしょきっと。  
だけどそれに似た感覚って他にもある。  
「幸せすぎて怖い」とか「美人薄命」とかもその手の感覚から来た表現なのではないかしら。  
美すぎるものは、同時にまったく相反するはずのものさえ含んでいる(ような気にさせる)んだ。  
「実際はどうか」なんてここでは無意味で、ただ「そんな気」が人の心に居座ってしまうだけ。  
桜には確かにそんな気にさせる力があると思う。あの花の咲かせ方の迫力には圧倒される。  
それにどこかで聞いた話だけど、花って自分の命がどのくらいか知ってるんだって。  
花によっては最期にポタッと落ちて終わる花もあるけど、そこらへんが桜の大物なところ。  
桜は最期のときも、儂く、美しく、派手に、印象的に終わらせる。なぜ桜はそうなんだらう。  
一体何の力を持っているというのだらう。うまく説明できないけど、あれは絶対に特別な植物だ。



私はよく早死にするかもしれないな、と思う。美人ではないけど、運がいいから。  
今、とても運が良くて、いろいろ幸せに生きているから。  
こんなに人生序盤の早い時期から運がいいと、もうそろそろ使い果たしてしまいそうな気がする。  
だからそれでもいいように生きていかなきゃ。  
誰だってそうだけど、いつ死んだって少しも不思議じゃない。  
生きてることのほうが不思議と言ってもいいほど。だって、自分という人間が存在するにあたって、一体どれだけ多くの偶然が重なったと思う？その確率より、明日死ぬ確率のほうがずっと高いはず。  
だからそう考えたら、命を削って歌ったり芝居したりしなきゃって思った。  
結果がださくても、それが今の精一杯なら仕方ない。何よりも今咲いていられる時間が大事で、それ以外何も必要じゃないんだから。  
桜がそんなつもりで咲いているかどうかは別として、あの生き方はカッコいい。  
花が咲かない季節や死に方も含めて。うらやましいと思う。  
いつも春がくるたびに、私にとっては特別な存在になる。生きてる価値を忘れたころに咲く花。  
と、さもセンチメンタルな風情を漂わせても、結局これも桜が「そんな気」にさせているだけなのでしょう。

それはそうと、もし私が今急に死んじゃったらどうしようと本気で考えた。  
つまり葬式とかそういうこと。まず菊は嫌だな、チューリップにしてほしい。  
音楽はビートルズにしてね。あと問題なのは骨だ。  
いくら親が私のために新しいお墓を買ってくれたとしても、  
そこにひとり入って誰かがくるまで待ってるなんて寂しいから、  
それよりもこっそり海とかに捨ててほしい。それとも本当に桜の下に埋めてもらおうかしら。  
おばけになって出たりはしないから。とにかくお墓は嫌。  
だったら私の大好きな人に食べてもらって、その人のカルシウムになりたいわ。



... THE ID